



♪♪♪ダービーへようこそ。♪♪♪

第82回 日本ダービー

2015.5.31 SUN 芝2,400m

[ レース回顧 ]

## ハイレベルなクラシック戦線で ひときわ輝いた「特別な存在」

The 82nd  
Tokyo Yushun  
2015.5.31

第82回日本ダービーは、皐月賞馬ドゥラメンテが単勝1.9倍の1番人気となり、皐月賞2着のリアルスティール、皐月賞1番人気のサトノクラウンがこれに続いてレースを迎えた。二冠を狙う1番人気馬と、逆転に懸けたライバルたちの戦いを振り返っていこう。

横手礼一 = 文  
text by Reiichi Yokote

タレント揃いの世代だからこそ  
競馬の質を磨く必要があつた

ドゥラメンテのダービーでの単勝支持率は、最終的に40%を超えた。確定オッズは190円。

1984年のグレード制導入から昨までのダービーで単勝100円台の人気に支持された皐月賞馬は、シンボリルドルフ、トウカイティオー、ナリタブライアン、デイープインパクトの4頭で、ダービーでの勝率は10割。というよりも、いずれも殿堂入りを果たした錚々たる顔ぶれであることにまず目が行く。

5頭目がドゥラメンテ。過去の4頭同様に危なげのない競馬でダービーを制し、名馬の列の末尾に加わった。5頭を並べても、現時点でそれほど違和感を感じえない。今年の3歳世代には、顕彰馬と並び立てるような特別な存在が潜んでいたのだ。

「潜んでいた」と書いたのは、やや正確さに欠ける。ドゥラメンテの資質の素晴らしさについては、デビュー当初から多くの人が認めるところだった。新馬戦から出走したレースではいつも単勝オッズは100円台。重賞初挑戦の共同通信杯でもそれは変わらなかった。このレースでクラシックの主役が明らかになることを、多くのファンから期待されていた。しかし、誤算が二つあつてドゥラメンテのブレイクはお預けになる。一つは、気性の激しさがレースで折り合い難となって露呈したこと。鞍上の指示に逆らつて頭を上げながら下がっていく場面がタ

ーフビジョンに映し出されて、場内はどよめいた。体力を消耗しながらも早めの仕掛けで巻き返して、直線ではいったん先頭に立つた。このまま押し切つていれば、前半の不手際もこの馬の怪物性を物語るエピソードになつていただろう。

ところが、ここで二つ目の誤算が発生する。もう一頭強い馬がいたのだ。のちにプリンシパルSを制するアンビシャスは3着、毎日杯を制するミュゼエイリアンは4着と、「普通の強豪」は抑え込んだが、ロスの多い競馬では負かすことができない相手が一頭いた。リアルスタイルだった。

トウカイティオーもナリタブライアンもディープインパクトも、圧倒的人気で春の二冠を制するような名馬は、大きく外を回る安全策が許されるだけの能力的な安全圏にいた。ドゥラメンテも例年ならば、荒削りだが迫力満点の共同通信杯勝ち馬として皐月賞に駒を進めていた可能性が高い。

そうならなかつたのは、今年のクラシック戦線にタレントが揃つていたからだ。リアルスティールにしても、次走のスプリングSでは朝日杯フューチュリティSの覇者ダノンプラチナは負かしたもののが、一步先に抜け出していたキタサンブラックをクビ差捉えられず2着に敗れた。負けて強しの内容だったが、いくら強くとも本番で負けては意味がない。タレント揃いの世代だからこそ、素質の高さだけでなく競馬の質を磨かないとライバルたちを上回ることができない。今年の牡馬クラシック戦線で1番人気が次々に



最後の直線、内からはサトノラーセン、外からはサトノクラウンが末脚を伸ばすが、馬場の真ん中からドウラメンテが突き抜けた



S.Suzuki

続いていた。直線が長い東京競馬場と言つても、前走同様に後方一氣の強引な競馬で前を行く馬たちを一蹴できるのか。圧倒的な身体能力に対する信頼と、一つの歯車が狂ったときの精神的な脆さに対する懸念。すでにスタートホースになりつつあったドウラメンテに一抹の不安も感じたのは、相反する二つのイメージが綱引きをしていたからだろう。それはライバル陣営にとつては、打倒ドウラメンテに向けた突破口ともなる。

一つの糸口は、前で競馬をすることだ。ドウラメンテほどの末脚に恵まれない馬たちは、リスクを冒して序盤に脚を使つてリード稼いで、本命馬のミスを待つしかない。ゲートが開くと、外枠からキタサンブラック、タガノエスペラソ、スピリッツミノル、内からコメート、さらにそれらを制して真ん中からミュゼエリアン。5頭がいち早く飛び出して先頭集団を形成した。

リアルスタイルの福永騎手は手綱を引いて、隣から出たドウラメンテを先行かせる。この馬は共同通信杯では脚を温存する競馬でドウラメンテを差し切つた経験があり、ドウラメンテ・マークがダービーでの作戦だったようだ。

しかし、正面に入る頃には落ち着きを取り戻した。共同通信杯の悪夢を回避できたのは、一つにはペースがある。共

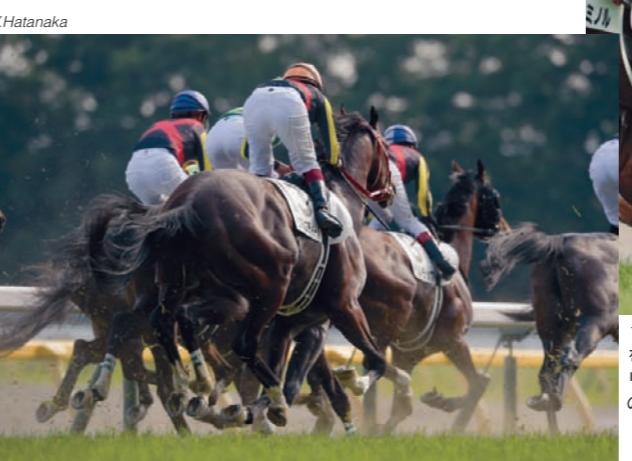
は前に壁を作れない。先行各馬を気負つて追いかける格好になり、1~2コーナーにかけてデムーロ騎手が手綱を持つていかれそうになつた。

外枠からのスタートで、ドウラメンテは前に壁を作れない。先行各馬を気負つて追いかける格好になり、1~2コーナーにかけてデムーロ騎手が手綱を持つていかれそうになつた。

しかし、正面に入る頃には落ち着きを取り戻した。共同通信杯の悪夢を回避できたのは、一つにはペースがある。共



横山典弘騎手が出ムチを入れてミュゼエリアンが迷いなく逃げる。皐月賞でも先行して3着に粘ったキタサンブラックが2番手に続いてレースを引っ張っていた



Y.Hatanaka



1周目のスタンド前。ドウラメンテは好スタートを切った馬たちを内に見ながら、外から来たスピリッツミノルも行かせる。リアルスタイルはそのドウラメンテを後ろから見る位置取り

The 82nd  
Nakayama Yushun  
2015.5.31

敗れていたのは、レベルの高さの一つの証明でもあった。

前哨戦の敗北を受けて、リアルスタイル陣営が皐月賞で出した答えは「先行策」だった。小回りの中山競馬場への対応であり、前走敗れたキタサンブラックへの対策でもあつたろう。

一方のドウラメンテは、ミルコ・デムーロ騎手への乗り替わり初戦ということもあってレース序盤から後方で折り合いに専念。他馬の動向には目をつぶって、自身の能力を出し切ることに徹した。

皐月賞を勝つための戦術としては、リアルスタイルが皐月賞で満点だったが、ドウラメンテは皐月賞のセオリーを無視した位置取りから暴力的なまでの末脚を繰り出して大逆転。レース後にリアルスタイルの福永祐一騎手が「完敗」を口にしたように、この時点でライバルたちとドウラメンテの差を分けたのは、すでに絶対能力の差だったのだろう。

### 1番人気馬が持つていた 相反する二つのイメージ

皐月賞では劇的な形で「一強」が宣言される結果になつたが、それでもライバルたちはダービーに向けて白旗を揚げるわけにはいかない。荒削りな皐月賞馬には弱点がいくつかある。

折り合いの問題は解決されたと言えるのか。淀みないペースの皐月賞では噴出しなかつたが、遅い流れになつたときに共同通信杯の二の舞いがないか。

また、今年の5月は雨が少なく芝の状態が良好で、先行馬に有利な馬場状態が



当たり前のことのようにあっさりと、  
ドウラメンテはダービー馬になった。



第82回東京優駿(日本ダービー) (GI) | 5.31 東京 晴・良 芝2400m 国際 指定 18頭

着順	馬番	馬名	性齢	斤量	騎手	タイム(着差)	単勝(オッズ)	調教師
1	⑯	ドゥラメンテ	牡3	57	M.デムーロ	2:23.2	1.9①	堀 宣行(美浦)
2	①	サトノラーゼン	牡3	57	岩田康誠	1 1/4	18.7⑤	池江泰寿(栗東)
3	⑪	サトノクラウン	牡3	57	C.ルメール	ハナ	6.3③	堀 宣行(美浦)
4	⑬	リアルスティール	牡3	57	福永祐一	2	3.8②	矢作芳人(栗東)
5	③	コメート	牡3	57	嘉藤貴行	3/4	234.9⑯	土田 稔(美浦)

6着以下ミュゼルスルタン、タンタアレグリア、ヴァンチャーレ、レーヴミストラル、ミュゼ

エイリアン、ダノンメジャー、ボルトドートウェイク、タガノエスブレッソ、キタサンプラ

ク、ペルラップ、コスマニンボール、アダムスブリッジ、スピリットミノル

単勝⑯190円(1 1/4) 複勝⑯130円(1 1/4) ①310円(4 1/4) ⑯210円(3 1/4) 枠連⑯1-7580円(3 1/4)

馬連⑯1-⑯1980円(5 1/4) ワイド⑯-⑯730円(5 1/4) ⑯1-⑯400円(2 1/4) ①-⑯1420円(14 1/4)

馬単⑯1-2220円(5 1/4) 3連複⑯-⑯1-⑯3950円(9 1/4) 3連単⑯-⑯1-⑯15760円(36 1/4)

春の牡馬クラシック二冠制覇は、のちの三冠馬を含めて23頭目。  
1番人気でのダービー制覇は一昨年のキズナ以来、34頭目となる

2のダービーレコード。父キングカメハメハが残した記録を11年ぶりに更新した。2着サトノラーゼンとの着差は1馬身3/4で、ナリタブライアンやディープインパクトのような派手な圧勝劇を望んだファンは不満も感じたかもしれないが、たとえばキングカメハメハのダービーでの着差も1馬身1/2だった。2着に敗れたハーツクライ以下、5着のスズカマンボ、6着のダイワメジャーも種牡馬として成功して、レベルの高いダービーだったことをあらためて証明している。

そういう意味では、今年のダービーの真価もこれから明らかになるはずだ。そもそも私たち達はダービーをゴールとして考えてしまうが、実際には経由地の一つに過ぎない。彼らの競走生活は始まりばかりで、自身の価値を示すための戦いはこれからが本番だ。

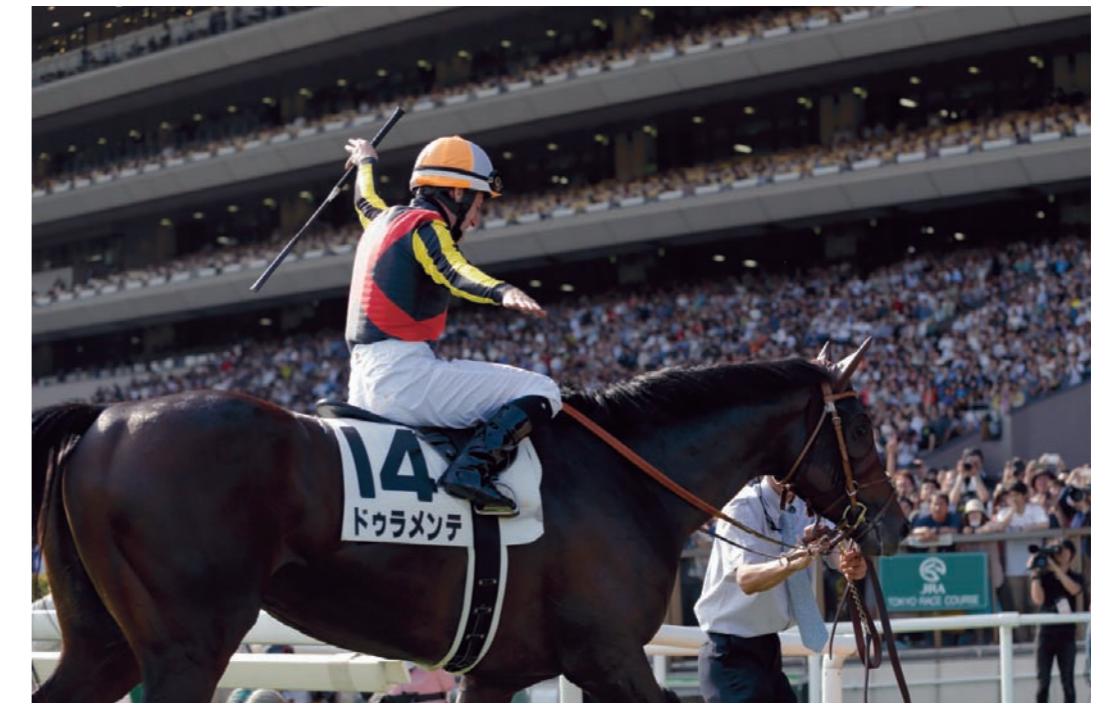
同通信杯は10000メートルの通過が60秒0、皐月賞では59秒2、そしてダービーでは58秒8だった。ダービーの10000メートル通過が58秒台になるのは非常に珍しいことだ。ライバルたちが刻んだ強気のラップにも助けられた格好で、ドゥラメンテは最大の危機を脱した。気がつけば、先行集團を射程に入れた中国外目という絶好の位置取り。今年のダービーはこの時点で勝負があつたと言える。

直線入口では外に開く各馬に押し出され形で弾き飛ばされて、皐月賞の直線での不行状が見る者の頭をよぎったが、デムーロ騎手はコントロールを失わない。前で粘るコメント、内から併せてきたサ

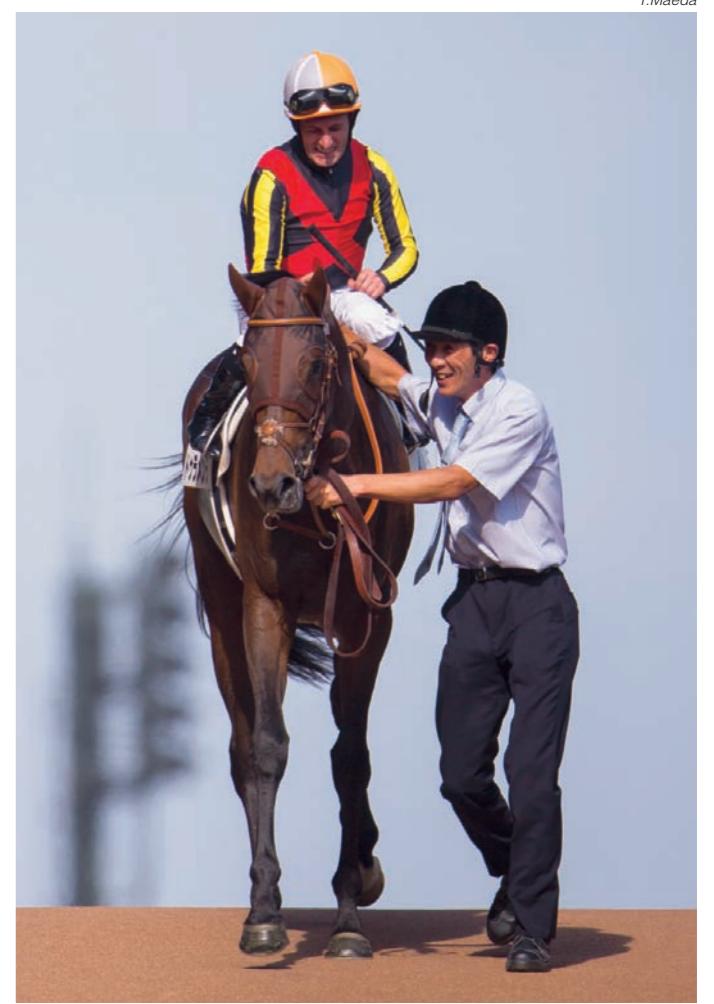
トノラーゼンを振り切ると、坂の上りで早くも先頭に立った。マークに回つたリアルスティールは道中のリズムが悪く、直線では舌を出して追撃が捲らない(のちに軽度の骨折が判明)。追い込んだサトノクラウン、ミュゼルスルタンは位置取りが後ろすぎて、勝ち馬を脅かすことここまで迫れない。驚きに満ちた皐月賞とは対照的に、当たり前のことのようにあつさりと、ドゥラメンテはダービー馬になった。

### 余力充分でレコードを更新 その真価はこれから明らかに

余力充分に計時した時計は、2分23秒



勝ちタイム2分23秒2はダービーレコード。  
父が残した記録を11年ぶりに更新。

2012年に生まれたサラブレッド6897頭の頂点に立ったドゥラメンテ。  
世代の頂点から新たな頂点へと、これからも戦いは続く